



秋山郷と焼畑農業

二木, 敏篤

(Citation)

兵庫地理, 22:51-57

(Issue Date)

1977-04-30

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002297>



秋山郷と焼畑農業

二 木 敏 篤

【はじめに】

山村、とくに隠田集落は隔絶した環境のなかで古い生活様式がよく保存されてきた。それが秘境ブームともいうべき観光の対象にされるようになり大きく変容する。そのうえ過疎化現象の歪みをうけて更に拍車がかかり昔日のおもかげを失ったものも少なくない。そのなかで、越後の文人、鈴木牧之「北越雪譜」「秋山記行」などにより古くから知られた秋山郷は今も良俗の失われていない地域として特筆に価する。昨夏、この秋山郷小赤沢での焼畑耕作見学の機会をえたのでその見聞の一端を紹介したい。

【地域の概観】

信越国境を流れる中津川は、三国山地の野反湖に源を発する魚野川と志賀高原北部の岩菅山から流下する雑魚川が秋山最奥の切明温泉で合流し北流する。東には赤倉山、苗場山、西は岩菅山、烏甲山など、いずれも2000m級の山地が中津川に迫り、その谷沿いに各集落が点在する。そして秋山の玄関口にあたる国鉄飯山線津南駅の東方で信濃川に合流する。現在の行政区画では、上流部から切明・和山・上ノ原・屋敷・小赤沢、それに新開拓部落五宝木までが長野県下水内郡栄村に、それに続く大赤沢・前倉・中の平・見倉・結東・清水川原・逆巻・穴藤は新潟県中魚沼郡津南町で、近代以前から秋山は信濃・越後二国に分かれていた。しかし自然的・経済的・社会的に両者は同一地域とみなされるが、公式名として秋山の地名はない。尚、本稿では栄村、つまり信州秋山郷に限って述べる。

秋山への道は津南町大割野からバスで小赤沢まではある。その深い峡谷沿いの道路は狭くて未舗装部分が多い悪路である。一日3便、しかも冬季は完全に杜絶する。それは中津川がほぼN-Sに走る構造谷で、わが国有数の豪雪地域とし、途中には雪崩多発地もあって11月下旬から4月、遅いときは5月上旬まで根雪が残り、積雪量も3~4mに達することに原因がある。この劣悪な交通事情が地域の隔絶性をかなり残存せしめた理由である。正式の戸籍作製は昭和2年の総選挙のとき、冬季出生児は役場に行けず届出を代理に頼んだため性別を誤まり既婚婦

人が徴兵検査をうけたといった実話すら残っている。教育免除地指定で昭和11年まで小学校も義務制でなく、電気は発電所を有しながら昭和29年の和山開設でようやく全部落に及んだほどであった。

【鈴木牧之と秋山郷】

文政11年(1828年)、秋山を訪れた鈴木牧之はその探訪記を「北越雪譜」「秋山記行」に残す。その旺盛な探究心により両書は当時の秋山の生活を伝える貴重な民俗的資料となった。“信濃と越後の国境に秋山といふ処あり、大秋山といふを根元として十五ヶ村をなべて秋山とよぶなり。秋山の中央に中津川といふありて川の東西に十五ヶ村あり。東の方に在る村は清水川原村三倉村中の平村大赤澤村天酒村小赤澤村中の原和山、西にある村下結束村逆巻村上結束村前倉村大秋山村(人家八軒ありて此地根元の村にて相傳の武器など持しものもありしが天明卯年の凶年に代なしてかてにかえ猶たらずして一村のこらず餓死して今は草原の地となりしときけり)屋敷村湯本此地東には苗場山天に聳えて連岳これにつゞき、西に赤倉の高嶺雲を凌て衆山これに双ぶ。一夫是を守れば万卒も越え難き山間幽僻の地なり(雪譜)”と。尚、天明飢饉では大秋山の北隣矢櫃村も同時に滅び、天保7年の飢饉で天酒村も姿を消している。劣悪な環境をどうにか切り抜けたのは

第1表 秋山郷の戸口推移

部 落名	年次		文政8年 (1825年)	明治31年 (1898年)	昭和26年 (1951年)	昭和35年 (1960年)	昭和45年 (1970年)	昭和51年 (1976年)		
	戸	人								
小赤澤	28	144	戸 33	戸 54	戸 59	人 327	戸 63	人 232	戸 56	人 198
屋敷	20	90	戸 18	戸 30	戸 39	人 194	戸 37	人 130	戸 25	人 88
上ノ原	12	60	戸 10	戸 21	戸 24	人 144	戸 27	人 101	戸 12	人 40
和山	5	15	戸 ?	戸 9	戸 12	人 69	戸 11	人 47	戸 33	人 115
切明	3	3	戸 1	戸 10	戸 5	人 12	戸 4	人 28		
五宝木				戸 12	戸 14	人 51	戸 14	人 54	戸 12	人 28
矢櫃	2	4								
天酒	2	5								
大秋山	5	15								
計	77	336	62?	136	153	797	156	592	138	469

市川健夫「平家の谷」「栄村史」役場住民基本台帳

文政8年の矢櫃、大秋山は天明飢饉で退転するまでのものである。

血縁関係を軸とした強固な連帯意識ではなかったかと思われる。

“婚姻は秋山十五ヶ村をかぎりとして他所にもとめず。婦人他所にて男をもてば親族不通して再び面会せざるをむかしよりの習せとす(雪譜)”の掟は失せても秋山ではすべての家が血縁の関係にあり、婚姻圏もかつてはほとんどが秋山内部であった。そのため少数の例外はあっても、小赤沢の福原・山田・阿部三姓、屋敷・上ノ原・和山では山田姓がほとんどを占める。

“冬は雪二丈餘もつもりて人のゆきゝもたゆるゆゑ、此時人死すれば寺に送る事ならざれば、此村に山田を氏とする助三郎といふものゝ家にむかしより持傳へたる黒駒太子と称する画軸あり、これを借りて死人の上を二三べんかざし、これを引導として私に葬る寺をさだめざるいぜんはむかしよりこれにてすませたり(雪譜)”は今も生きており、小赤沢阿部家所蔵の軸が用いられている。このように秋山散策の最大の興味が牧之の両書を手し今日との比較対照にある。

【地域の変貌】

隔絶山村といえども、近代以前から外部商品経済の浸透はかなりあった。秋山でも牧之を案内したのが此地で商いする桶屋団蔵であったし、正徳・享保年間の鉱山開発、天保年間の越後商人を通じての木製品販売などがあげられるがいずれも永續せず地域の性格を変えるものとはならなかった。

山村の本格的な変化は一般に明治以降に生じてくるがその要因として、大規模な治山・治水工事、山林開発、電源開発とそれに伴う道路建設によるところが大きい。秋山でも例外でなく、明治27年、外部資本である直江津木材会社による木材搬出に始まる。しかし、大正9年からの中津川第一発電所建設工事で本格化する。切明付近で取水し中津川左岸20km余の地下導水管を通じ秋山の入口、穴藤に最大出力3.9万KWの発電所を建設した。大割野から切明まで工所用軽便鉄道を敷設、多数の労働者が働いた。この賃金収入が村にもはより大きな地域変化を与えたのである。焼畑農業を基盤とする封鎖的自然経済は崩れ、焼畑耕地は $\frac{1}{2} \sim \frac{1}{3}$ も減少する。この工事では道路改修がなされなかったため発電所完成後は再び隔絶性をとり戻す。恒常的な地域変化は道路交通の改善が必須で、第二次大戦による林産資源の需要増大で秋山の山林が注目され、林業会社の手でトラック道路が開発される。昭和12年にようやく下結東に通じた道路が16年小赤沢まで伸びる。しかし外部資本による林産開発は輸送事情が悪くいずれも失敗している。昭和29年から切明発電所の建設工事が着工、28年最奥の切明まで自動車道路が完成する。これに並行して外部・地元資本による林業関係、道路・砂防工事なども盛んにな

り主産業であった農業の比重は低下し焼畑耕作も消滅した。そして過疎化も昭和40年代に入って顕著になってきたようである。

【焼畑農業】

“深山幽谷_二而東南西は高山を頂き罷在候故、世間分者陽氣も甚敷致相違、陰氣勝之場所、都而薄地、僅二三年立候へは忽地味失、作物不実法故 ---- 樹木を伐倒し、焼野畑_二仕候へば、陰地焼土と変じ、草木久来之塵芥と共に灰と相成、陽氣勝て焼土灰之中へ種を蒔候へは陰氣重し養ひを請、初年は宜作物を刈取、其翌年より地之陽氣失_二順し段々出来方劣り、三四年も過候へは、陰氣強作物不_二用立_一此地を捨、又、別場所を切開候故、其難行苦行可_二推知_一事_二候 ---- 平生生草木実計之食物故、力量も乏敷、斧山刀鋏、鎌求候金錢も無之、悪敷道具計ニ付骨折而已其功者無御座候”と代官に報告した名主の「文政八年酉年秋山様子書上帳」に往時の農耕の事情が明確に記されているが、山間地で夏期も日出遅く、しかも朝霧のはれ難いうえ日没が早いいため日照時間が短く気温も低い。春は五月中旬頃まで降霜をみることもある。谷地形で河岸段丘などに僅かに平地が分布するにすぎず。“是迄尋し村々の内に、清水川原や此村(小赤沢)には、小田二三枚宛、家近き処にのみ甚珍敷見請たりしと云ふに、稲は村に寄り少々づつ新田を起し候。極早く此秋山で仕附たもの五十年に届かず、遅きものは、右の小田十四五年以来と。実に村中に算る斗り故、藁迄も大切に致すと云(記行)”っているように水田は少なく、“米は、一年中に大晦日の晩に限(記行)”る貴重品であった。この自然的要因から秋山における産業の中心は自給自足の焼畑農業におかれていたのである。

“大木原を畑にするには、前の年、手透次第に、小木は伐り捨に倒し置、斧も及ぬ大木は、太とひ所の皮さへ剥ば皆立枯となり ---- 其翌年三月下旬、雪消次第に、日和続たうへ、風上より火を附るに、先年伐り倒たる小木の枝々が焚附になり、一面に大火となり、燃て大小の枝迄火燃上り ---- 此灰がこやしと成り、其年稗を蒔き、其翌とし粟、其又翌年産、又翌としより順々に、粟或蕎麦、又は大豆、何れ粟勝に作る事十年、又は地元能い処は十五年^十年もの作ると、其うへは地元が瘦るから捨置くと自然に茅野となる ---- 斯十年前後茅野にして荒したうへ、又、茅に火を附燃と、又、茅の灰がこやしとなり、蒔初めの年は前に云ふた通りにて稗にて、翌としよりはこやしも仕立られず、少しづつ何れ畝なしに種を蒔く(記行)”と小赤沢周辺の焼畑耕作を述べ、さらに上結末でも類似内容を古老から聴取しているが、両者間に火入れ時期に一ヶ月余のずれがあり、前者は典

型的な春焼き型だが後者は“大木の皮を前の年剥，立枯にして，其翌とし四五月時分，小木は草諸共に伐倒し，三十日も過て日和後に火を附る（記行）”と夏焼き型で，栽培作物も“其年は蕎麦，其翌年は粟，其翌としは稗，かように替る替る作る内に，粟ならば三度位作り，八箇年目位には土瘦て実らず，故に荒し置（記行）”とし，生産性も川西が劣ると両者の差異を明らかにしている。川西の劣るのは日照に関係があるようである。

近年まで行われた小赤沢の焼畑耕作は，七月下旬から八月上旬に草木を伐採し，一週間か十日後の好天日の午後火入れする。つまり夏焼きで記行での春焼きから変化している。その時期や理由は明らかでない。作付作物も初年がソバ，これは栽培期間が短いため冬の早い秋山に最も適合する作物である。翌年は畝たてで粟，三年目は大豆が一般的で，ほかに二年目荏草ついで粟—大豆—粟と輪作し最後はソバ，荏草，黍で後は放棄される。「記行」では耕作期間が7・8年～14・15年位とあるのは他地域のものと比較して驚くべき長期にわたるが，「栄村史」では地力肥沃を理由にあげている。生産性についても村史では豊年時は稗反収5石，ソバ8石と高い数字をあげている。しかし人口増加に伴う焼畑用地の相対的減少

第2表 秋山郷焼畑の反収収量(石)

	20世紀初頭	1951年現在
そば	1.0～2.0	0.3～0.8
あわ	1.2～2.5	0.4～0.8
大豆	0.5～2.0	0.4～0.8
ひえ	1.0	0.5
荏草	0.6	0.3～0.4

市川健夫「高冷地の地理学」による

が休閑期間を短くし，地力が消耗し生産性も急激に低下したようである。明治頃の反収は他地域の焼畑と大差がないが戦後は $\frac{1}{3}$ と大幅に低下した。ここに焼畑衰退の一因があった。焼畑用地はすべて部落共有地で個人が自由に耕作でき，すべて部落共同体に平等の権利を有することである。村落自治は少数の家柄の古いものが世襲的に権力を有したとはいえ，経済的基盤は共有地利用にあり，厳しい規制はあっても基本的に平等であり身分的隷従関係は存在せず，そこに隔絶山村一般と異なる重要な点がある。分家に際し，それが同時に一人前の権利を平等に享受しうる部落と，一定額の入会金を必要とする部落など細部に多少の差異はあっても，基本的には秋山ではこれらが共通する。たゞ転出者は土地手入れなどの義務を果さぬ故に権利を失い，転入者は共有地での一切の権利は認められぬ。つまり焼畑規模を規定するのは伐採・除草に必要な労働力の差異である。

一方，明治後期から開田化が始まるが多くの経費，労力が必要だけに容易に進展せず，大正中期の発電所工事による賃金収入を得ると促進される。こゝで問

第3表 秋山郷の耕地の推移(永久畑+焼畑)

(反) 題は土地所有

年次	部落別	小赤沢	屋敷	上ノ原	和山
明治20年		270.1	515.1	134.6	43.9
昭和13年		280.6	715.4	74.5	46.1
〃 21年		399.0	565.0	73.0	46.0
〃 26年		171.0(60.0)	180.0(120.0)	200.0(100.0)	46.0(30.0)
〃 35年		86.9(8.3)	90.4(21.7)		190.9
〃 40年		65.7	68.7		122.3

で、共有地の水田化はその永続使用で半ば私有地化することになる。開田能力の有無が貧豊の差を大きくする。

市川健夫「高冷地の地理学」畑地は焼畑含むが、()は焼畑面積を示す。

植林にも同様の問題が生じ

第4表 秋山郷の水田の増加 (反)

年次	部落別	小赤沢	屋敷	上ノ原	和山
明治20年		45.7	15.4	8.6	1.1
昭和13年		103.8	26.7	9.3	1.1
〃 26年		106.0	34.0	14.0	6.1
〃 35年		146.5	55.4		49.7
〃 40年		153.8	70.5		58.2

市川健夫「高冷地の地理学」による。

るので“山割”とよぶ水田適地、植林予定地を各戸に分割する方法が採られた。尚、水田造成は第二次大戦後の食糧危機で更に進んだようだが、経済的に採算がとれず、近年、ほとんど行われなくなっている。幸い用水は豊富であるが冷水のためぬめを造った水田でもかなり青立ち箇所が拡がり反収は低いようである。

【おわりに】

昨年8月初、小赤沢でわが国からほぼ完全に消滅した焼畑耕作を学術参考のため地元福原初吉氏の協力で実施した。一昨年に続く第2回で21m×24m(約5アール)で約20度の山地斜面が山焼きされ、あとにソバが栽培され、二年目の焼畑には粟が栽培された。本年は夏季大学地理講座が焼畑耕作を折り込んで実施される予定と聞いている。宿泊施設は4温泉があるほか、各部落に民宿施設がかなりある。地理を学ぶ者にとり興味の尽きぬ地域であり“此秋山こそ神代の長寿の如く。是天賦を自然に守り来たり、此土地相応の栃の実・楳の実・粟・稗搾を---賞飮し。是則天より給る所の土地の産物にして、自ら仙術を学ぶがごとく---正直一遍にして、夜戸さゝず---自然の仙境に生れた人のごとく寿は長しとかや。希

は^{はんせい}范蠡にあらねど、一度は此秋山の猿飛橋の奇景の勝地^{いほり}に茶を結び、中津川の清流に命の洗濯したらんにはと思ひ待りぬ(記行)¹⁾との牧之翁の感慨が生きつづけているのが今の秋山郷ではなかろうか。

(註) “里俗の伝へに此地は大むかし平家の人の隠たる所といふ(雪譜)”

(参考資料)

- 鈴木牧之：北越雪譜 岩波文庫 岩波書店 1976年
 鈴木牧之：秋山記行 東洋文庫 平凡社 1976年
 市川健夫：平家の谷 令文社 1975年
 市川健夫：高冷地の地理学 令文社 1971年
 教育技術編集部：開けゆく原始共産制の山村，地域社会の課題 小学館 1955年
 青木恵一郎：焼畑農業の“太古の山村” 秋山郷，山の民の記録 新評論社 1954年